

## 『JAPAN REVIEW』 No.4 (1993年刊) 掲載論文

雑誌名	日本研究
巻	11
ページ	iii-viii
発行年	1994-09-30
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1368/00006175/">http://id.nii.ac.jp/1368/00006175/</a>

# 『JAPAN REVIEW』 NO. 4 (1993年刊) 掲載論文

## 太平洋民族骨格の人類学的研究 序

埴原和郎

ここに掲載する5篇の論文は太平洋民族の骨格標本に関する人類学的研究報告である。このプロジェクトは日本人と太平洋民族の系統関係を分析する目的で計画されたが、同時に太平洋民族の古病理学的ならびに古疫学的研究も並行して実施された。

本プロジェクトはB.P.Bishop博物館（ハワイ州立自然・文化史博物館）、東京大学、国際日本文化研究センター、札幌医科大学、自治医科大学、および東京都老人総合研究所の共同研究として行われた。研究資料はビショップ博物館に保存されている太平洋民族骨格標本で、1984～90年にわたって調査が行われた。このうち骨格標本の調査は1984年から1989年の期間に実施され、最後の1990年には主としてビショップ博物館図書室において種々の研究情報や文献の収集が行われた。

参加者および役割分担は次のとおりである（\*前所属）。

埴原和郎（研究代表者） 東京大学理学部人類学教室\*、国際日本文化研究センター（総括、頭骨および歯の研究）

百々幸雄 札幌医科大学解剖学教室（頭骨の非計測形質の研究）

鈴木隆雄 札幌医科大学解剖学教室\*、東京都老人総合研究所疫学部門（古病理学的および古疫学的研究）

小泉清隆 東京大学理学部人類学教室\*（頭骨の研究）

石田 肇 札幌医科大学解剖学教室（頭骨の非計測形質および四肢骨の研究）

埴原恒彦 自治医科大学解剖学教室\*、札幌医科大学解剖学教室（頭骨および歯の研究）

以上の参加者はすでに本プロジェクトの成果の一部を報告しているので、ここではとくに太平洋民族および日本人を含む隣接諸民族の系統に関する報告を収録した。

この研究を実施するにあたってはビショップ博物館の前館長 E. C. Creutz 博士、現館長 W. D. Duckworth 博士、前人類学部長 Y. H. Sinoto（篠遠喜彦）博士、および多くの博物館員のお世話になり、同時に種々の分野の研究者から貴重な研究情報の提供を受けた。参加者一同を代表し、これらの方々に厚くお礼申し上げる。またこの調査は文部省科学研究費補助金（国際学術研究）の援助を受け、文部省、東京大学理学部および国際日本文化研究センターの担当官には種々の配慮をわずらわした。さらにこの報告の出版にあたっては、国際日本文化研究センター出版委員会（委員長・伊東俊太郎教授、幹事・柏岡富英助教授）のお世話になった。深く感謝の意を表する。

## 縄文・アイヌ集団と太平洋諸集団の系統関係

埴原和郎・埴原恒彦・小泉清隆

要旨：縄文人と太平洋諸集団との系統関係については、現在二つの対立する考え方がある。第1は「拡散モデル (diffusion model)」または Turner の「多地域進化モデル (local evolu-

tion model)」といわれるもので、東南アジアの古アジア人が2万年以上前に日本列島に移動して縄文人の祖先となり、また別に数千年前に太平洋諸島に進出した群が現在の太平洋集団を形成したという考えである。このモデルは多くの人類学者や関連領域の研究者に支持されている。

一方、Brace らは「縄文・太平洋集団 (Jomon-Pacific cluster)」の存在を想定し、異なる考え方を提出した。それは縄文人、またはその系統に属する集団が南下して東南アジアに達し、さらに大太平洋に進出して太平洋諸集団を形成したという考えである。片山も同様の考え方を表明している。

これらの対立する二つの仮説についてはすでに多くの研究が行われ、論争的になっている。本研究の目的は、従来あまり使われていない頭骨示数に基づいて二つの仮説の信頼性をさらに確かめるとともに、縄文人と近隣諸集団との系統関係についても分析を進めようとするものである。

データとして使った示数は頭骨長幅示数、頭骨長高示数、上顔面示数 (Kollmann)、眼窩示数および鼻示数の5種である。また比較した集団は縄文人、アイヌ、南西諸島の日本人、ポリネシア人、ミクロネシア人、メラネシア人、東南アジア人を代表する25集団である (Table 1)。

統計学的分析の結果、縄文・アイヌ集団に最も類似するのは太平洋諸集団ではなく、古代東南アジア人を代表すると思われるフィリピンのネグリティ族およびボルネオのダーク族であることが明らかとなった。また全体として東南アジア人 (ジャワ人を含む) は縄文・アイヌ集団と太平洋諸集団との中間的特徴をもつ。更新世以後の東アジアにおける小進化の過程を考慮に入れると、この結果は他の多くの研究とともに拡散モデルを支持するものであるが、Brace らや片山が提出した仮説とは矛盾する。

考古学や民族学などの証拠からみても、縄文人が南下して東南アジア人や太平洋諸民族の祖先になったということは考え難い。たとえば縄文文化に高度な航海術があったことを示唆する遺物は発見されておらず、また日本の説話や生活習慣も、むしろ東南アジアに起源をもつと思われる例が多い。

一般に人間集団の系統を論ずる場合には、通時性・地域性を考慮して比較する集団を慎重に選ぶとともに、身体・文化の両面を含め、自他の多くのデータを総合的に考慮する必要がある。

## 環太平洋地域の人類集団の頭蓋形態小変異： 太平洋民族の起源を求めて

石田 肇

要旨：ハワイ人およびチャモロー人の頭蓋形態小変異を調査し、アジア、アメリカおよびシベリアの人類集団と比較検討した。これら太平洋民族の頭蓋形態小変異については、別の論文で詳しく述べている (石田・百々、1993)。眼窩上孔についてみると、ハワイ人の頻度は高く、アジアの集団と同じ程度であるのに対して、チャモロー人はその頻度が低い。横頬骨縫合残存の頻度は、両集団ともに、極めて低い。頭蓋形態小変異を基に、集団間の距離を計算して、クラスター分析その他の手法を施してみた。その結果、ハワイ人とチャモロー人は互いには、それほど類似しないが、両者とも、東アジア集団や、中央アジア型のシベリア集団に近く、縄文人やアイヌ、他のシベリアや北アメリカの集団とは類似しない。このことは、縄文と太平洋民族との直接の類縁関係を否定するものである。

## ハワイ人およびチャモロー人の四肢骨の形態特徴

石田 肇

**要旨：**ハワイ人およびチャモロー人の四肢骨の計測を行い、分析した。両者の四肢骨の長さには差は認められないが、関節部の大きさ、骨体の周や径は、チャモロー人のほうが、有意に大きい。また、四肢の近位部と遠位部の比をとると、ハワイ人の四肢骨は、チャモロー人に比べ、有意に、遠位部が長い。予報的に、日本列島の諸集団と比較を行った。ハワイ人の四肢骨は、縄文時代人やアイヌに類似するが、チャモロー人は、日本列島の諸集団とは、似る傾向がない。一方、橈骨と上腕骨との長さの比では、縄文時代人とハワイ人は、大きく異なる。機能的な適応といくらかの遺伝的要因が四肢骨の形態形成に関与していると思われるので、人類集団の変異を理解するために、より良い項目を選び、比較していく必要がある。

## ポリネシア諸集団の歯冠形質について

埴原恒彦

**要旨：**ポリネシア人の起源と拡散過程については考古学、言語学、形質人類学等の研究領域から様々な仮説が提唱されている。しかしこれらの研究結果は必ずしも一致しておらず、多角的な研究結果の統合が不可欠である。「太平洋民族の起源に関する人類学的研究」班では、頭骨、四肢骨、古病理、歯の研究からポリネシア集団をはじめとする太平洋地域諸集団の形質的特徴を比較検討してきたが、ここでは太平洋民族の歯冠形態を明らかにすると共に歯の形態からみた彼らの起源と系統を検討した。

ポリネシア6集団、ミクロネシア3集団、メラネシア1集団、東アジア7集団、東南アジア4集団の計21集団を比較対象とし、歯冠計測値および非計測的歯冠形質のデータを多変量解析法により分析した。詳細は本文に記載した通りであるが、歯冠形質については次のような結果が得られた。

- (1) ポリネシア諸集団の歯冠形態は比較的均質である。
- (2) ポリネシア諸集団はミクロネシア集団、東南アジア集団に類似した歯冠形質を示す。
- (3) 西ポリネシア地域集団—トンガ、サモア集団—がポリネシア諸集団中もっとも東南アジア集団に類似する。このことは東南アジア集団と類似した形質的特徴をもつ集団が、西ポリネシア地域に最初に移住したとする従来の主張と矛盾するものではない。
- (4) 東ポリネシア集団のなかではマルケサス諸島集団がトンガ集団と最も類似性を示す。この結果は、東ポリネシア地域への移動の過程でマルケサス諸島が最も初期の居住地であったとする考古学的仮説と一致する。
- (5) マルケサス諸島がポリネシア地域において最初の拡散中心となり、ソサイアティー諸島が第2の拡散中心となったとする考古学的、言語学的仮説と歯冠形質に基づく分析結果とは必ずしも平行するものではない。
- (6) ミクロネシア集団はポリネシア集団および東南アジア集団に類似した歯冠形態をもつ。
- (7) ミクロネシア集団中ではマリアナ諸島集団がより東南アジア集団に類似し、ポナペ、トラック諸島集団はポリネシア集団に比較的類似する。このことは多くの研究者が指摘するよう

にミクロネシアがポリネシアよりも複雑な民族史を示すことを示唆する。

(8) ポリネシア集団、ミクロネシア集団の歯冠形質は縄文人よりも東南アジア集団に類似性を示し、太平洋民族の縄文人起源説に関しては否定的である。

(9) 縄文人と太平洋民族（ポリネシア、ミクロネシア集団）の類似性は東南アジアを介して共通の祖先をもつことによると考えられる。

## モカブ出土の先史ハワイアン古人骨の古病理学的・古疫学的研究

鈴木隆雄

要旨：ハワイ、オアフ島モカブ遺跡出土の先史ハワイアン古人骨349体についての古病理学的および古疫学的研究を行った。対象とした骨格はいずれも比較的保存が良好で、性および年齢推定の可能な成人骨格である。

古病理学的には外傷や感染症、腫瘍など実にさまざまな病変が認められた。それらの中で特に、比較的高頻度に出現する骨結核と、(対照的に) 骨トレポネーマ症の欠如という現象は、太古の昔に長い航海を経てなされたヒトの移住とこれらの感染症の伝播との関係において興味のもたれることが示唆された。

骨に出現したストレス指標を用いて疫学的解析もなされたが、それらは先史ハワイ人達の生活や生態に結びつく特有の結果を示していた。

## 近東の先史時代人の古環境—花粉学的調査からみた二、三の考察—

スィッツァー・ボッティマ

要旨：本報告は、近東の先史時代の古環境を花粉分析の結果から論じたものである。

北部・西部トルコは、アナトリア高原地帯のステップ、黒海沿岸の森林地帯そして北部と西部の低地に区分され、これらの地域間の古環境の変遷の地域性を花粉分析の結果から比較検討した。

特に晩氷期から完新世への移行期における人類の自然への干渉の地域性や気候の変動が人類文明の盛衰に与える影響の地域性について本報告では重点的に論述した。

また、トルコ南西部のベイシェヒール湖の花粉分析の結果から初めて指摘された紀元前2000年紀の樹木花粉と草本花粉の比率の特徴的な変化は、気候変動と深いかわりがあることを指摘した。

## 伊勢神宮の起源と太陽神・天照大神信仰

秋間俊夫

要旨：この論文は天照大神と伊勢神宮の起源を海底の根の国の母神に求める。母神は海幸・山幸神話の豊玉姫・玉依姫に代表される。原始時代男性首長は呪術によって海底におもむき、母神（女巫）との聖婚により海の豊穡を支配した。伊勢のサルメも海の母神で、サルタヒコは海

に出入りする太陽神＝首長であった。

海の母神が空に移るには三輪山信仰との結合が重要な役割りを果たした。三輪は3つの茅の輪を重ねて蛇の形にしたものだが、輪はまた太陽でもあり、山頂の日向社にまつられた。大物主は海から光を発してやってきた太陽神＝蛇神である。崇神、垂仁時代に蛇と太陽は分離され、太陽信仰が伊勢に移され、土地の太陽神＝海神信仰と結合した。箸墓から東へ2キロに檜原神社があり、そこからやや南行2キロで三輪山頂があること、箸墓、檜原神社の線を東に行くと斎宮跡に出ること、ヤマトトヒモモソヒメとヤマトヒメは同家系の巫女と思われること、斎宮を訪れる蛇神の伝説があること、二見浦に茅の輪が太陽として祭られていること、中世伝説が天照大神と三輪の神を同一とすることは重要だ。

海の母神が天空に移るのを可能にしたのは空を始源の海と見る世界観である。浦嶋伝説では根の国に星神がいる。天の鳥船信仰、真床覆衾が天界、根の国の両方から人界への移動に使われることは重要だ。海幸・山幸神話は、大嘗祭と深くかかわるが、紀の一書で海神が山彦彦に「3つの床」と真床覆衾の使い方をテストする話は、大嘗祭の神座がいかに使われたかを表す。ニギノミコトは元来「海神少童」であり、天照大神を訪れるスサノヲには母神と聖婚する男神の面影がある。

古代王権の軍事化で女巫の神は伊勢に疎外され、天上に祭り上げられた。また三輪の日向は伊勢、九州へ移行して上下、水平の空間が再編された。

### 嫉妬心学と恍惚としての認識－津島佑子の短編 「菊虫」

リヴィア・モネ

**要旨：**批評界や文芸ジャーナリズムでは津島佑子は妊娠・出産・育児等、女性特有の経験を中心に、数少ない特定のテーマやモチーフを繰り返して追求している作者のように思われている。つまり津島が捉えようとしているテーマやモチーフが知恵遅れの兄（弟）とその妹（姉）との近親相姦、未婚の母・離婚した母やその子供の、生々しい、愛や暴力や殺意に満ちた日常生活、女の身体性（セクシュアリティ）等、現代における女性を中心とした人間関係の新たな様相の表現への模索である。本稿では津島の短編「菊虫」（『逢魔物語』所収、1984年発行）を取り上げる。作品の解説・解釈を行いながら、津島文学についての、上記のような、一般的な読み方にとらわれず、作者のテキストが探り続ける文化的・思想的・政治的言説空間を捉えようと思う。そのためには、現在の国文学研究や文芸批評、フェミニズム批評や所謂「政治的に正しい批評」（politically correct criticism）のディスコースさえも超越した、新しい読み・批評のストラテジーを展開せねばならない。「菊虫」の場合、作者は、作品の中核である「嫉妬」をアイロニーや滑稽味やファンタジーの世界として表出しているが、この魅惑的言説空間を解説するための、新たな方法論の提示を筆者は意図するものである。

### 清朝時代における近代植物学の源泉

ジョルジュ・メティエ

**要旨：**現代中国の植物学文献における用語と、19世紀あるいはそれ以降の文献における用語とはたいへん異なっている。この理由は、中国の文献だけを対象にして考察を進めても解明する

ことができない。19世紀初頭の日本で何が起こったかを見なければならないのである。研究の結果、日本と中国の植物学者は相互に影響を与え合っていたことが分かった。さらには、今世紀初頭の中国植物学の記述法に起こった劇的な変化は、日本語からの借用語によるものであることを認めざるをえないのである。